

ついて 1959 年度事業計画案及び予算案を審議し原案通り可決された。最後に支部規約案の審議に入り原案通り可決され即日実施された。支部の事務所は、大阪市東区安土町2の1 安土町野村ビル日本規格協会関西支部で本年度の支部員は九州在住者を含め 178 名である。

### 3. 第1回研究発表会

昭和 34 年 6 月 20 日

1. ダイナミック・プログラミングについて  
甲南大 西田俊夫氏
2. ビジネスゲーム知見 阪大 横山 保氏

### 4. 第2回研究発表会 昭和 34 年 7 月 25 日

1. 生産計画の一例 東洋紡 関 和文氏
2. Reliability に関する研究  
阪大 宮脇一男氏

### 5. 第3回研究発表会

昭和 34 年 8 月 22 日

1. 数値解析法の一分野としてのモンテカルロ法  
武田薬 門川清美氏
2. 顧客の索引力関数について  
関学 西治辰雄氏

### 6. 第4回研究発表会 昭和 34 年 9 月 26 日

1. 放送番組編成の OR 的考察  
毎日放送 安田 稔氏
2. 新しい MAPI 法について  
阪大 長浜穆良氏

予定していたが伊勢湾台風のため流会となる。

### 7. 昭和 34 年 11 月 14, 15 日 阪大工学部における

本部の秋季大会に合流して研究発表を行った。

### 8. 昭和 35 年になってから現在までに特筆すべき

事業を行っていない。

## 関西支部 1959 年度会計報告

収入の部	
前年度繰越金	84,959円
学会費収入	2,700
本部支給金	50,000
未払金	1,400
雑収入(秋季大会懇親会費)	33,000
利子収入	115
計	172,174

支出の部	
印刷費	17,754 円
資料発送費	10,564
調査研究費	14,000
通信連絡費	4,810
秋季大会費	31,765
懇親会食代	31,520
雑費	2,646
	113,059
差引次期繰越金	59,115

## 1960 年度事業計画

前年通り隔月毎に会員を対象とする講演会を開催し、その間に適宜研究発表会を行う。

### 予 算 案

収入の部		支出の部	
前年度繰越金	59,115	事業費	50,000
本部支給金	80,000	事務費	30,000
		雑費	5,000
		次期繰越金	54,000
計	139,115		139,115

## 国際統計協会(ISI) 第 32 回総会記念特別行事について

本学会としては先きに OR 関係について ISI の国内出席者を推せんするよう運営本部の依頼を受けたが、この頃から世界の統計学者が東京に参集するこの機会に特別講演会、セミナーをもつべきだという意見が会員より提案された。そこで 34 年度第 6 回理事会で小委員会を作りこれをすすめる案が可決され、34 年 12 月 25 日昼に後藤理事、増山、森口、河田の 3 氏、学会より、横山、宮沢、中原の各理事、矢部幹事が集って準備会を開いた。その結果実行委員会を設けることになり委員長山口氏、副委員長多田氏をはじめ井上洋一、池田誠、柏井澄夫、原野秀永の諸氏を委員とする委員会が生まれ、数次にわたる

会合が開かれて準備が進められた。

特別記念講演会は幸にも朝日新聞社の好意により同社主催、また日本数学会、統計科学研究会、日本 OR 学会 3 者の共同後援となった。ソ連はコルモゴロフ、ネムチユーノフ両氏共来朝せず、結局英国のフィッシャー卿、インドのマハラノビス教授の 2 人となったが、5 月 28 日の会場である朝日講堂では定刻 1 時間前から来聴者が見え既に定刻早々入場を制限する程で、溢れた人々は講堂の外側でスピーカーの話に聞き入るといふ盛況、出席者は 800 名を越えた。フィッシャー卿は「Scientific Thought and Human Reasoning」という題で、米国流の

考え方と実際的な場合との矛盾を指摘され、マハラノビス教授は「Statistics and National Planning in India」という題で、インドの5カ年計画におけるORの役割を強調され、共に聴衆に深い感銘を与えた。これらの講演については本学会英文誌に全文掲載される。後援学会の名で両氏に記念品をトランジスタラジオを贈呈した。

特別記念セミナーはISIが終了し関西観光がすんだ6月13日に東京会館で開かれた。このセミナーは上記の講演会がPRを目的としたのに反し、海外の第一線研究者とわが国の第一線研究者との討論をはかり、これによるわが国OR界の水準向上を第一目的とした。会員よりアンケートを求めその質問者を中心とし、また若手の研究者も加えて行われた。この詳細な内容については本誌次号に発表される。そのメンバーは

	招待学者	リーダー	参加者
A-1	D. V. Lindley (英)	河田 竜夫氏	10
A-2	H. Wold (瑞)	宮沢 光一氏	8
B-3	H. C. Hamaker (和)	森口 繁一氏	9
B-4	C. R. Rao (印)	増山元三郎氏	10

でこの朝関西旅行より帰京した Lindley Hamaker 両氏も加えて11時より各自紹介、11時30分より和食弁当による昼食、外人学者も皆箸を使って食事をした。13時より、A, B 2班に分れてセミナーが開始された。各講師共最近の問題の話で参加各員は熱心にくい入るような態度で討議が行われ、途中お

茶の時間になってホッと一息入れるといった熱の入れ方であった。

17時半よりディナーが開かれ、岸会長、厚母前会長の挨拶、各リーダーによる討論の報告のほか、招待学者を代表して最年長の Hamaker 氏から挨拶があった。幸い、Rao 夫人の参加をみて紅一点錦上添花を添えた。

19時にディナーを終了し4班に分れて更につ込んだ討論が行われた。討論は何時果てるとも判らない程であったが、Wold 氏がこの夜米国へ向けて出発するので20時半終了した。しかし、その後も熱心な参加者は宿舍の第一ホテルまで送り、更に1時間以上も討論するという有様であった。

6月14日の観光は Rao 氏夫妻のみ参加された。新緑の候に都郊外の野火止、川越をハイヤーで廻り、日本の農村風景、特に田植や草取り風景に興じながら印象深い1日を終え、これで特別記念行事の幕を閉じたのである。この行事に当り朝日新聞社をはじめ法人会員10社の協力を得られたことを深謝する。

#### 会員の皆さんへ

★秋季大会は、11月5,6日神戸大学において開催、7日は奈良観光にきまりました。多数参加を希望します。

★学会誌用の原稿用紙を事務局の方で用意いたしましたから、御寄稿下さる方は事務局へ御請求下さい。

#### 編集後記

ISIの総会、IFORSへの加入など学会としての事務に忙殺されて、第1号の発行がついにのびのびになってしまったことを会員の皆様に深くお詫びする。しかし次号以下の手配は順調に進んでいるので、第2号からはこういった御迷惑をかけずにすむことと思う。そして本年度和文4冊、英文4冊発行のお約束は石にかじりついても果すつもりである。

前役員からの引継ぎの中に、会誌のていさいを変更した方がよいというアンケートが多かったので考えて欲しい、ということがあったが、先頃の編集委員会で討議した結果、会誌というものの性質上、むやみにかえない方がよいという意見が圧倒的に強かったので、この件は当分見送ることとした。御意見をよせられた方々に対して御報告すると同時に、今後もこういった会誌に対するきたんのない意見を御寄せいただくことを御願する次第である。

IFORSの第2面の総会が南仏で開かれるにつれて、森口副会長をはじめ、河田、近藤、野本氏の4名を本学会から、日本代表として送った。丁度今頃は会議が始まっている頃と思われる。今度の大会の出席に際して一番問題になったのは、次回の総会(1963年)を日本でやれといわれた時には引受けるか否かの議論があった。大いにやるべしという積極派と、時機尚早なりとする慎重派の間で、はてしのない論議がくりかえされたが、結局会長の裁断をあおいで、“自ら求めることはしないが、要請があれば当然引受ける”という線で、精しいことは森口副会長に一任された。事の結着は今後の成り行きにまかせるとして吾々としては三年後には、日本で総会が引受けられるくらいの意気込みですべての事を運ぶ覚悟は必要だ。

(横山)